

研究報告
(研究プロジェクト)

メダリストへの軌跡

—監物永三—

監 物 永 三

【経歴】

- 1970年3月 日本体育大学体育学部体育学科卒業
- 1970年4月 日本体育大学副手
- 1972年4月 日本体育大学助手
- 1976年4月 日本体育大学講師
- 1980年 スポーツ指導者在外研究員（アメリカ）
- 1983年4月 日本体育大学助教授
- 1992年4月 日本体育大学教授
- 2015年4月 日本体育大学特任教授

【競技歴】

- 1968年 オリンピックメキシコシティ大会 団体総合優勝, 鉄棒3位, 個人総合4位, あん馬5位, 平行棒5位, ゆか6位, 跳馬6位, つり輪7位
- 1972年 オリンピックミュンヘン大会 団体総合優勝, 個人総合2位, あん馬3位, 平行棒3位, ゆか4位, 跳馬4位, 鉄棒4位, つり輪5位,
- 1976年 オリンピックモントリオール大会 団体総合優勝, あん馬2位, 鉄棒2位, つり輪5位, ゆか6位,

1. 競技との出会い

中学1年（大阪市）時、校庭の中庭で体操部が「後転とび」の連続をしているのが目に入った。当時の遊びの中ではチャンバラが主流の時代であったことから私には忍者に見えた。これは凄い、私もやってみたくて直感的に感じ即入部した事がそもそもの始まりであった。幸い担当の先生が大卒2年目くらいの現役選手であったことも私には幸運であった。市内の地域大会に2度程出場した記憶がある。ユニホームは、今では考えられない白色で綿の体育ズボンとランニング肌着であったことを思い出す。

高校進学は、これから伸びる学校であるとの先生の言葉があり清風学園高等学校を選んだ。入学すると大阪では優秀な選手が3名程入学していた。初めて練習する器具「あん馬」「つり輪」「平行棒」などはとても難しく筋力を必要とする種目であった。私は、身体が硬く、筋力もないことから厳しい1年間を過ごすこととなった。しかし、タンプリング（マットでの転回系）が得意であったことから、当時採用されていた競技種目のタンプリング選手として青森県開催の高校総体に出場することができた。しかし、大阪から青森まで夜汽車の長旅は辛く、デッキ（当時はドアが開いたままであった）に座り先輩の素足が気持ちよいと

の助言もあり素足を投げ出しのんびりしていたところ駅の通過が解らず、足先がプラットホームに接触し大怪我をするハプニングに襲われた。タンブリング選手なのに足が使えないとはなんと皮肉な出来事であろう。大会まで練習もできず、本番では痛い思いをしてシューズを履き、目眩をしながらやったことを思い出す。高校2年時では体操競技選手として、高校総体に個人出場することが出来た。その時の個人優勝者が2年生の塚原光男選手であったことを知った時はショックであり全国にはすごい選手たちがいることを初めて実感した。高校3年時の高校総体は、近畿大会時に鉄棒での終末技で足をバーに接触させて落下、救急車で運ばれ頸椎捻挫で入院し高校総体出場はならなかった。退院後、岐阜国体予選を通過し初の国体出場、結果は思いもよらず個人総合優勝を果たした。

2. 日体大の思い出（選手生活の思い出）

大学での1年間は寮生として割り当てられた2時間が体育館使用時間であり、110名程（1・2年を含む）の寮生のため、1種目（25名程）30分ローテーションで3種目の時間帯が割り当てられていた。種目での待ち時間は補強や柔軟に当てていたが、当然練習時間は足りず、野外の鉄棒やグラウンドでのランニングが常であった。唯一の大会出場目標は関東新人戦であり、1・2年生合同チームで編成され先輩コーチの厳しい目があった。11時、12時終了は常で、厳しい練習であった。当然のこと寮の夕食や入浴には間に合わず、辛い1年間であったがお陰様で体力もつき、正月休みは多くの選手が帰省することから十分な練習時間が確保でき、2年時にはレギュラー入りを果たしインカレに出場することができた。その年の11月全日本選手権でメキシコオリンピック大会1次予選を通過し、3年時のNHK杯においてオリンピック日本代表選手に選ばれ加藤沢男、塚原光男、監物永三の3名の学生選手が代表を獲得した。その

年のインカレでは団体・個人総合共に優勝することができたが、種目別の跳馬で足首を捻挫し靴も履けない状態でメキシコオリンピック大会へ羽田空港から出発した。

3. オリンピックでのメダル獲得

3.1 メキシコオリンピック大会

初めての飛行機、初めての海外遠征、初めての日本代表等々、すべてが初めて尽くしの大会であった。中でも高度2,000mでの競技会は想像していなかった。何の事前準備もなく現地入り、初めて感じる体験であった。「空気が薄いとは・・・」考えたこともなかったことである。運動するとすぐに息切れがする。日頃、女子選手などは「ゆか」を平気で一本通しをするが、当時音楽はフロアのコーナーでのピアノ伴奏であった。伴奏は進んでいるが選手は動いていない状態なのである。また、消化器官にも影響をおよぼし、「おなら」が非常によく出るなどの日頃感じないようなことが多くあった。足首の負傷もあったことから、オリンピック大会ではインカレ以来、初めてのゆか、跳馬の演技であった。また、オーダーでは「あん馬」6番、「つり輪」1番など、プロテクターを付ける時間もなかったほどの厳しい大会であった。

3.2 ミュンヘンオリンピック大会

中山、加藤、塚原、笠松、監物、岡村と平均年齢25歳の団塊世代を中心とした日本最強メンバーといわれた時代であり、確かに無敵の日本であった。団体総合1位、つり輪1位、個人総合・平行棒・鉄棒などは1・2・3位を独占した。国内で勝つことが世界で優勝することにつながった時代でもあった。この大会を境に個人総合、種目別の出場者は1ヶ国2名までとルールも変更された。

また、世界情勢が不安定な時期でもあった。選手村でテロ事件が発生し、世界に大きな衝撃が走った出来事があった。幸い日本選手たちは競技が終了し、現地日本人関係者の慰問や休暇などで

選手村を離れていたこともありテロに遭遇しなかったことは幸いであった。しかし、オリンピック大会が国際政治情勢に利用されたことは非常に残念でならない。

3.3 モントリオールオリンピック大会

2年前の世界選手権大会個人総合優勝の笠松選手は盲腸炎にて欠場（補欠五十嵐選手と交代）、藤本選手は膝靭帯断裂（自由演技の「ゆか」で痛め、「つり輪」で断裂）し戦列から離れる、競技ルールの変更（規定演技1位チームは自由演技「あん馬」スタート、2位「ゆか」スタートの2種目のみ変更、日本が規定1位と予測して）等々、チームにとって最悪の状況での戦いであった。結果は、規定演技2位となり自由演技は「ゆか」からのスタート、ソ連（現ロシア）の思惑は失敗に終わったが、自由演技後半5名での戦いは厳しいものがあった。しかし日本人特有の団結力（絆）がもたらした団体総合優勝であった。

日本体操はローマ、東京、メキシコ、ミュンヘン、モントリオールとオリンピック大会5連勝。プラハ、ドルトムント、リュブリアナ、ヴァルナ、ストラスブール世界選手権大会5連勝、合計10連勝の記録を打ち立てた。その中に6大会も参加することができた事は私の喜びである。しかし、それからの日本体操に陰りが見えたことも事実である。ジュニア育成を怠った日本体操は下降に向けて一直線に辿った。

4. その後の人生

大学卒業後、教員として母校に就職し、授業と学生の指導を兼務しながら選手としてオリンピック大会の出場を目指すことになった。

当時は今と違って、選手に対する優遇制度はなく、朝1番に出勤、研究室の掃除、授業の手伝い、自分の授業、学生の練習指導、合宿所の教官としての指導などなど多忙な毎日であった。32歳で選手生活を終え、当時（昭和56年）、アメリカの

オリンピック選手の主流は大学生であったことから、文部科学省の海外指導者派遣制度を利用し、アメリカへ1年間の研修をすることができた事は、私の指導に対する考え方を大きく変えるきっかけとなった。昭和60年から平成12年まで学生の指導と体操協会の強化コーチを兼務した。大学ではコーチから監督となり、東日本14連勝、インカレ10連勝、全日本優勝を4回することができた事に大いに役立った。体操協会では昭和58年から平成8年まで男子強化部員として、また強化委員長として世界選手権大会及びオリンピック大会の審判、コーチ、監督として帯同し選手たちの活躍に貢献できた。この時期は日本体操の低迷期でもあったことから目標設定を3位以内すなわちメダルを獲得することを最大の目標として戦った。しかし平成8年（1996年）アトランタ・オリンピック大会での惨敗で責任を感じ退任した。

また、平成元年から平成3年までの3年間、低迷する日本体操界を改革すること目的として日本体育協会スポーツ医・科学研究を利用し「将来のジュニア育成指導研究」と題して、ソ連のJr現場での指導法を学んだ。終了後、報告書としてまとめJr現場の指導者の方々の参考として伝達するとともに、Jr規定作成を手掛けることが出来た。それらの成果が5・6年後（池谷、西川選手の活躍）から徐々に表れだし、日体スワローでのJr選手育成事業での最後の選手として白井健三選手が活躍できた事は非常にうれしく思っている。

それから数年後、日本体操協会、日本体育協会役員として、日本体操の発展や日本のスポーツ指導者育成のために少しながらもお役に立てたことに感謝をしていると同時に素晴らしい人格者の方々に接する機会をいただいた事は素晴らしい体験であり同時に感謝している。

5. 後輩に一言

「若さは力」という言葉がある通り今しかでき

ない事、今やるべき事（競技外を含む）を決め、夢や目標に向かって将来計画を立て一直線に進む学生時代であってほしい。優秀なアスリートは、自分のやるべき技の習得や目標に対しては素直に対応する。個性は尊重するが人は素直になることは重要である。また、体操競技は対人競技（相手の弱点を攻撃する競技）と違って、理想像を追い求める競技である。それぞれ個人の特性を生かし、弱点は個性で対応することも必要である。徹底した時間をかけて練習する期間は必要であり自己の弱点強化となる。しかし省エネでの対応も重要である。要点を絞り集中し試合を想定した練習も必要である。また、すべてのアスリートが優勝できるわけではない。メダルを取れるのは一握りであり、個人で優勝できるのはただ1人である。それを目指すのは良いことではあるが、将来を考えるといろんな選択肢をもって計画を立てておく事が大切で、そのためには今何をしなければいけないのかをしっかりと考えておくことが重要である。また同じ年齢の若者が集い、同じように精神的にも肉体的にも忍耐し努力しているその時の仲間は将来の良い友として大切にしてもらいたい。

また、体操競技を愛し実践することは素晴らしい。しかしなぜこのように体操競技は発展してきたのか、これからどのように進むべきなのかを理解するためには体操競技の歴史を知っている事が大切である。過去があって現在があり、そして未来を創造することができるのである。過去にどんな選手達がいる、どんな技が作り出されてきたのかなど、ほとんど知らない選手たちがあまりにも多すぎる。これから少し学んでほしい。

